

金曜日の夜に事件は起きる

山本明文◎著

---

ルポ

---

日本の  
**保健所  
検疫所**



日本生活協同組合連合会



## プロローグ

### 金曜日の夜にドラマは始まる

本書は、保健所、検疫所、地方衛生研究所など公衆衛生に携わる人たちの仕事を追いかけたドキュメントだ。書名の『金曜日の夜に事件は起きる』は、この本の企画のため奈良県立医科大学健康政策医学講座の今村知明教授よりアドバイスを受けた時、今村教授が何気なくつぶやいた言葉がもたっている。

厚生省（当時）時代にはBSE事件や薬害エイズ、O157事件などの難事件を担当した今村教授は、保健所の所長を勤めた経験も持つ公衆衛生の専門家だ。現在、大学教授として医療政策や公衆衛生、医療経済などに取り組むが、中でもフードデیفュンス（意図的に食品を危険にさらす要因からの防御）研究では第一人者として知られている。

今村教授からは、保健所の仕組みや組織、法的な裏付け、検疫所の役割など、基本的なことから資料とともに丁寧を教えていただいたが、ご自身が保健所長を勤めていた時のことに話が及ぶと、そこでふと口にしたのが、

「保健所への事件の通報は、どういっわけか金曜の夜に入るんですよね」

という言葉だった。

その理由は取材を終えた今もはっきりとはしない。だが、本書で題材として取り上げたいくつかの事件の大部分も、確かに金曜に第一報が入っている。残念ながら（という言い方ははなはだ不謹慎ではあるが）、金曜に始まってはいない事件もあるが。

今村教授も触れていたことだが、保健所の役割のひとつには「衛生警察」といべき仕事がある。

ひとたび事件（食中毒や感染症）が起これば、現場に駆けつけ事情を聴取（病状や被害の規模を確認）して状況をつかみ、犯人（細菌やウイルス）のめぼしをつけて証拠を揃え（検査し）、追いつめる（感染経路を明らかにして被害の拡大を防ぐ）。食中毒の場合、食品を扱う事業者には営業停止などの処分を下す。まさに、警察の役割だ。

だが、犯人も並大抵な存在ではない。

第1章から第3章はそれぞれ、O157、新型インフルエンザ、ノロウイルスの三つの事件を題材に、そこで奮闘する保健所、検疫所、衛生研究所の人々に迫った。特に第3章で取り上げたノロウイルスは、ある時は人から人への感染で被害を拡げ、ある時には食品の中に入って食中毒を引き起こす、変幻自在の手強い相手で、居所を次々と変えながら巧みに逃げおおせていく姿は、追いつめても追いつめてもギリギリのところまで姿をくまらず

大胆な犯罪者に見える。

どこまで被害は及んでいるのか、これからどこへ拡がる可能性があるのか。逃げながらも害毒をまき散らしていく細菌やウイルスというを追う仕事は、まさに犯罪者を追いつめていく緊迫したものであり、それにはまず、高い専門性が欠かせない。

だが、単に犯人を割り出して捕まえればそれで済むわけではない。それは、被害拡大を一刻も早く食い止める時間との戦いでもあり、体力と気力の勝負でもある。

第4章では、感染症を媒介する蚊を追いかける人たちに登場していただいた。日本では過去のものとして忘れがちな蚊を媒介とする感染症だが、ごく最近でも、アメリカではわずか数年で蚊が媒介役となる感染症が全州へ拡がってしまった。温暖化が進み、蚊の棲息地域が北上している現在、感染症の危機は決して過去のものではない。鋭い感覚で数ミリの敵を追いつめる専門家の目には鬼気迫るものがあった。

第5章では検疫所の輸入食品の監視業務に携わる人に取材し、水際で食品の安全を守る仕事の全貌を聞いた。輸入食品については時折、安全性を不安にさせる突出した事件が起こり、そのたびに私たちは大きな不安に陥れられるが、専門家の持つ冷静な目は、事件のたびに右往左往させられ、そのくせしばらくすればすぐに忘れてしまう安直な姿勢を考え直させてくれる。

本書に登場する人たちは解決不可能と思えるような大事件にも臆することなく立ち向かっていく。時には批判を浴びることもあるが、それを受け入れる度量を持ち、それでも問題解決の道を諦めないプロたちだ。

私たちの健康はそんな人たちに支えられている。その人たちが繰り広げるドラマに迫っていききたい。

(登場していただいた方の肩書は2009年夏、取材時のものです。)



ブローグ — 金曜日の夜にドラマは始まる 3

第1章 0157を追いつめる! — 13

食中毒にも感染症にもなる0157 15

園内全員に感染の危険が 20

「感染症には、被害者も加害者もない」 27

150を超えた検査数 32

最小限で食い止めた被害、だが、残された謎 35

第2章 新型インフルエンザ 攻防の最前線 — 41

WHOはついに「フェーズ4」を宣言した 43

「水際対策」の最前線、国際空港 48

### 第3章

### 変幻自在、ノロウイルス

79

機内検査は、汗だくの重労働に変わった 52

「時間稼ぎ」の本当の意味 57

検査は本当に正しく行われているのか 62

なぜ、偽陽性ばかりが続くのか？ 67

見えてきた真相 71

秋から本格流行へ 74

決して減らない食中毒 81

不条理なウイルス 84

被害は一気に全県レベルへ 88

被害者が、一瞬にして加害者に 95

食中毒なら、必ず問われる責任 98

終わらない人間と食中毒との戦い 104

## 第4章 体長5ミリの敵

109

空港が戦っていたもうひとつの敵 111

たった一匹から国中へ拡がる感染 113

半世紀で世界中に行き渡ってしまったウエストナイル熱 118

今もわからない侵入経路 122

張り巡らせたトラップ 125

日本に感染を拡げるもうひとつの要素 “温暖化” 128

着々と揃い始めている新しい感染症流行の条件 133

## 第5章 輸入食品、安全性の虚実

135

メラミンの分析手法を確立せねば 137

検査で全てがわかるわけではない 142

結果を出す以上、検査する側にも責任が伴う 146

強化が続く輸入食品監視体制 151

熟練した技が求められる食品衛生監視員 155

強烈な事件に隠された輸入食品の真実 159

エピソード — 決断の重みと依然残る金曜日の謎 168

資料編 175



オーイチコーナナ

# 0157を 追いつめる！

---

## 第1章



## 食中毒にも感染症にもなる0157

オーイチゴリーナ

2007年4月、ゴールデンウィークも迫ったある日のことだ。昼少し前、奈良県郡山保健所の健康増進課感染症係、西崎貞子係長は、たまたま取った電話の内容を知ることになった。「ついに来るべきものが来た」と、生唾を飲み込んだ。

大和郡山市は、奈良市の南西に隣接する人口9万1千人の街だ。享保9（1724）年に柳澤吉里が甲斐の国から大和郡山へ入部したのを契機に拡大たとされる金魚の養殖は、今も地域の伝統産業として定着し、その養魚場があちこちに見られる。晴れた日には、水面に青空と緑がゆらめき、のどかな風景にいつそう潤いを与えてくれる。

だが、こんなに美しい土地にも、感染症は容赦なくやってくる。

奈良県郡山保健所は、大和郡山市をはじめ、周囲の天理市、生駒市、山添村など県北部の8市町村を管轄する保健所だ。電話はその中のひとつの診療所からだ。0157の患者が出たという。

西崎係長が感染症係に配属されたのは2年ほど前だ。その時からいつかはこんな電話を取るようになるとは覚悟していた。だが、いざ、実際にそうなってみると、緊張感は想像

以上だった。

O157については、今ではごく普通の人でも一度は耳にしたことがあるはずだ。腸管出血性大腸菌のひとつで、激しい下痢や血便を起こす。多くの場合、1週間ほどで治るが、症状を起こした人の6〜7パーセントは、産み出されるベロ毒素によってHUS（溶血性尿毒症症候群）や脳症などの合併症を引き起こし、特に抵抗力の弱い乳幼児や高齢者は腎臓や脳に重い障害を残したり、重篤な場合、死に至ることもある。

1982年、アメリカで起きたハンバーガーによる集団食中毒事件の際に発見された比較的新しい菌で、日本でもその後から見つかっているが、国内で多くの人がO157を知るようになったのが、1990年、埼玉県浦和市（現在はさいたま市）で起きた幼稚園での事件だろう。井戸水を介して集団感染が発生し、園児2人が死亡した。日本国内に大きなショックを与えた。

O157の名をより多くの人に刻みつけたのが、1996年7月に起きた事件だった。大阪府堺市で、学校給食を介して市内の小学校42校に被害が拡がるという集団感染が発生したのだ。患者数は9千5百人とかつてない規模に拡大し、そのうち3人の児童が命を落とすという痛ましい結果を引き起こしている。

多くの対策が採られてきたが、O157の感染は決してなくなることはなく、今も毎年、

何らかの事件が起きている。

ひとつには、O157は100個足らずの菌で感染する、非常に強い感染力を持つこと（食中毒で代表的なサルモネラ菌は100万個以上で感染）。そしてもうひとつ、潜伏期間が4〜9日と長いため、感染源を特定するのが難しい。そのため感染拡大を防ぐことが困難になっている。

さらにもうひとつ大きな特徴がある。O157は食中毒の性質も持ち、同時に感染症でもあるということだ。

O157は経口感染、つまり、菌が口から入ることで感染する。まず、汚染された飲食物を食べた時に感染するので、そこで症状を起こせば食中毒ということになる。だが、通常の食中毒菌と違うのは、被害が食べた人だけにとどまらず、そこから、さらに拡がっていくことだ。

感染によって下痢をした子どもや高齢者の排泄物の処理をした人の手洗いが充分でなければ、手に大腸菌が残り、それが口に触れることでうつることもある。O157は、話をしたり、咳、くしゃみで空気感染することはない。また、汗などを通しての接触感染もない。だが、このように人を介して人にうつるケースもある。

従来、食品中で増殖して食べた人を苦しめる食中毒と、人から人へとうつって病気を引

き起こす感染症は、全く別なものとして扱われていた。前者は細菌によるものが多く、後者はウイルスによるものが主で、ここ郡山保健所をはじめ、多くの保健所で、感染症を扱うグループと、食中毒を扱うグループが分かれているのはそうした事情による。

だが、O157は、食品を通してでも、人と人との接触によっても、どちらでも感染を拡げていく。ある意味、巧みな生き残り方ができる菌であり、それは、人間にとってはなほだ迷惑でやっかいな存在であることを意味する。過去の大規模な事件を見ても、その一筋縄ではいかない性格が多くの被害をもたらしている。

現在は、1996年ほどの大規模な集団感染こそ見られないものの、それでも毎年、全国でO157の感染は20件前後、報告されている。患者数も数十人から千人近くまで、減ったり増えたりを繰り返している。2010年に入ってから、三重県の中学・高校で、計189人の集団感染を引き起こした。

奈良県群山保健所へは毎日、ひっきりなしに外部から連絡が入ってくる。最近是全国的に食品に関する事故が続いていることもあって、一般消費者からの苦情や問い合わせも多い。下痢をしたが、昼飯を食べたあの店が怪しい、調査してほしい。そんな依頼もあるが、細菌やウイルスが症状を引き起こすには潜伏期間があり、怪しいという店は実は潔白で、数時間前に自宅で食べたもののほうが怪しかった。そんな例も少なくない。

だが、この日のケースはそんなあいまいなものではなかった。連絡は医者からで、下痢をしている保育園児を診たが、血の混じっている便の様子から0157への感染を疑い、すでにその検査も行ったという。結果は予想通り、確かに0157であり、しかも、0157が産み出すペロ毒素の存在も確かめたというのだ。園児はすでに回復に向かっているそうだが、真正正銘の0157事件だった。

西崎係長は、さっそく上司と、保健所のトップである山田全啓まきひろ所長に報告した。山田所長はすぐに衛生課食品衛生係と健康増進課感染症係の職員を集めて緊急会議を開いた。集団感染と食中毒の2方向から原因を探るためだ。

山田所長の念頭にあったのが堺市の事件をはじめとする過去に起きた多くの集団感染事件だった。今回、特にひっかかったのが、患者が保育園児であるという点だ。

「0157は9割以上が幼稚園か保育所で起こっています。子どもどうし、接触して遊ぶところでは特に拡がりやすく、また、子どもは抵抗力が弱いために被害も大きくなりやすい。その時も患者は保育所の園児。何としても被害の拡大を防止しなければの一心でした」(山田所長)。

医者にかかった園児自身は回復に向かっているというが、0157の検査では2日で結果を出す専門機関もあるが、一般には1週間ほどを要する。ペロ毒素を確認するにはさら

にそこから2日ほどかかる。つまり、園児が下痢を起こして医師の診察を受けてから、これまでに少なくとも8〜9日は経っていることになる。潜伏期間も考え合わせると、感染したのはさらにその数日前、つまり、郡山保健所に連絡が入ったこの日からさかのぼって、すでに10日以上、長ければ2週間が経過している計算だ。

感染源は食べ物だろうか、あるいは別の人間だろうか。人間であれば、家族か、同じ保育園の園児である可能性が高い。過去の例を見ても、抵抗力の弱い幼い子どもが集まる幼稚園や保育園は、0157にとっては格好の増殖の場だ。しかも、10日間という期間は0157にとって被害を拡げるのには充分過ぎる時間だった。一刻の猶予も許されない。これ以上の感染拡大を食い止めねば。

山田所長は、食品衛生係と感染症係の職員が1人ずつペアにして2組を作り、ひと組は園児の家庭へ、もうひと組は保育所へと2手に分かれて向かわせた。食品係の職員とともに保育園へと向かったのが、感染症係の西崎係長だった。